

# 子どものスポーツ活動に関わる保護者の役割と可能性

—レスリング競技を事例として—

## The role and potential of parents involved in their children's sports activities

— Case study of wrestling —

三須亜希子<sup>1)</sup>, 相澤勝治<sup>1)</sup>, 木村元彦<sup>1)</sup>

Akiko MISU, Katsuji AIZAWA, Motohiko KIMURA

### Abstract

Developing children's physical literacy through sports activities is likely to give them familiarity after adolescence and contribute to the establishment of exercise habits after maturity. Coach and parents play an important role in children's fulfilling sports activities. Recently, there has been reports regarding the interaction between parents and coach during sports activities regarding the role of parents in sports activities. In this study, the role of parents in wrestly were investigated to clarify the actual situation of parents with children involved in sports, and the "Good Parents Statue." A survey of 54 elementary to middle school parents involved in wrestling asked for answers in free-description format. These findings suggest that parents' troubles and incongruity in their children's sports include "relationship between parents," "differences in attitude toward care and cooperation", "values for winning or losing", "values for learning" and "relationship with leaders". In the future, it should be necessary, to consider the roll of parents in various sports.

**Key Words** : children's sports activities, relationship between parents and child, adult influence, physical literacy, wrestling

**キーワード** : 子どものスポーツ, 保護者の関わり, 大人の影響, 身体リテラシー, レスリング

### 背景

発育発達期のスポーツ現場において、子どもの身体リテラシーを高めることは、青年期以降にスポーツに親しみを与え、成熟後も運動習慣の確立に寄与する可能性が期待されている。身体リテラシーとは、「さまざまな身体活動、リズム活動、スポーツ活動などに自信をもって行うことができる基礎的な運動スキルおよび基礎的なス

ポーツスキル」(日本陸上競技連盟, 2018) や、「人生において身体活動の価値を尊重し、責任をもって関与するための動機付けと自信、運動有能感、理解」などと定義されている(早乙女ら, 2018; International Physical Literacy Association, 2017)。また、身体リテラシーは、身体的領域・心理的領域・社会的領域・認識的領域の4つの領域で構成され、生涯にわたって豊かな運動・スポーツライフを実現するための資質や能力と定義した実践プログラムの取り組みがレスリング競技を通じてなさ

1) 専修大学スポーツ研究所

れている（専修大学スポーツ研究所，2023）。さらに、すべての人の身体活動の価値を重視する学校体育のあり方を思索するための概念と示されており（三上，2021），学校体育が義務教育に位置付けられていることを考えれば，発育発達期の子どもたちが身につける能力としてその重要性は高いものと考えられる。木村・尾縣（2021）は，運動有能感を，身体リテラシーを構成する一要素と位置付け，運動有能感がレスリング競技の競技経験と正の相関関係を認めたことを報告していることから，身体リテラシーの発達は，スポーツや運動の参加・継続と関係することが推察される。久崎・石山（2012）によれば，スポーツや運動に対する子どもの参加・継続や有能感の発達において，スポーツや運動の解釈者・評価者としての保護者の影響は大きいと示されている。スポーツに参加する一般の子どもを対象とした調査では，親のプレッシャーや否定的な感情反応あるいは，パフォーマンスに対する期待が強いほど，子どもが抱く楽しさは減退することが明らかになっている（Averill and Power, 1995；Babkes and Weiss, 1999；Brustad 1988；Leff and Hoyle, 1995）。これらの研究から，保護者の行動や感情表現が，子どもの試合や練習のパフォーマンス，運動有能感に影響することが考えられる。

一方，近年では子どもたちが遊びの延長からスポーツを行う環境や機会が減少しており，習い事としての取り組みをはじめ，近隣のスポーツクラブや運動部活動が主要な活動の場となっている。「第5回学習基本調査報告書」（ベネッセ教育総合研究所，2015）では，1990年から2015年までの小学生の習い事の種類の経年比較を示してしており，1990年から2015年まで小学生の習い事における「スポーツ」の割合は最も高く，1996年以降増加を続けていることが示されている。習い事として子どもたちがスポーツ活動に参加するためには，ユニフォームや用具の購入，大会参加や遠征のための費用，送迎など，保護者による援助が必要になるため，子どもたちがスポーツ活動の実施に至るには，保護者のサポートをはじめとする関わりは必要不可欠であるといえる。児童のスポーツ習慣形成に関する保護者の関わりを研究した渡辺ら（2014）は，「子どものスポーツ参加に投資をする親が増えてきた」，さらに，子どものスポーツ参加に対する親の期待が高まり「子どもに対する親の関与が年々強まっている現状がある」ことを指摘している。子どもをスポーツ系の習い事に通わせている保護者を対象とした意識調査の研究は数多く見られる（岡田，1977；小松，1992；ベネッセ教育総合研究所，2009；渡辺ら，

2014，小倉，2017；村田・渋谷，2017；宮本，2023）。これらの多くは，「スポーツをすることに対する保護者の期待」や「スポーツ系の習い事にかかる費用，日数，負担」，「それぞれのスポーツクラブ（教室）の運営に対する満足度」をアンケート調査やインタビュー調査によって明らかにしている。その中で「スポーツをすることに対する保護者の期待」として多く挙げられていたのは，「スポーツを楽しむこと」や「人間的に成長すること」，「目標を見つけて頑張ること」など，そのスポーツが上手になることよりも人間教育的な効果を期待することが多かったことが述べられている。人間教育的な効果は，先に示した身体リテラシーの4領域のうちの社会的領域・認知的領域に一致するものであり，保護者たちはスポーツ系の習い事を通じて，身体リテラシーの発達を期待していると考えられる。また，スポーツ系の習い事に通わせている保護者は，子どものスポーツ行動を親である自分と同一化させるスポーツ同一化があることが明らかになっており，井梅ら（2017）によれば，親の性別，子どもの競技レベル，親のハラスメント（競技内容攻撃，関係性攻撃）の関係から，男性はスポーツ同一化が高いほど，攻撃的な声かけが多いことが示唆されている。「競技内容攻撃」は，子どもの試合中，あるいは試合後に子どものプレーでの失敗や競技技術の足りなさ等に攻撃的な声かけをしてしまうことであり，「関係性攻撃」は，人間関係における攻撃行動から構成され，遊びに行く際に誘わない，本人のいないところで不満を話すなど，仲間関係を操作することによる他者への攻撃行動である。女性は，同一化に加えて子どもの競技レベルが高いほど，攻撃的な声かけが多いことが明らかになっている。男性では弱いチームの保護者ほど，関係性攻撃が起りやすい。これらのことから，保護者の性別によって，保護者の役割や，子どもを支援するための保護者のあるべき態度が異なる可能性が高いことが示唆されている。興味深いことに，9歳から14歳のレスリング競技に参加している少年たちに親の行動や反応に関する項目とスポーツの楽しさに関する項目に回答した調査結果では，レスリングの活動中に親がプレッシャーを与えたり，母親が子どものパフォーマンスに対して否定的な感情を示したりはしないと知覚している少年ほど，また，親が満足して活動を支援していると知覚している少年ほど，レスリングの活動が楽しいと感じていることが明らかとなっている（Scanlan and Lewthwaite, 1986）。このことから，保護者の子どもへの感情や態度が，子どもの心理的側面に影響する可能性が示唆されているもの

の、しかしながらこの報告は海外の研究であり、本邦のレスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者を対象とした報告は見当たらない。また、地域スポーツにおける子ども同士、保護者同士の関係に与える影響として、小学校4年生から高校生を子として持つ父親と母親を対象とした研究において、保護者が地域スポーツの中でどのような肯定的および否定的な経験をしているかの報告によれば、親から見た子どもについて、「子どもが試合で勝った、体力がついた、仲間と仲良くなったこと」が肯定的な経験として挙げられており、否定的な経験はその逆に、「子どもが負けた、レギュラーから外された、スタメンから落ちた」が挙げられている（大橋ら・2015）。親自身に関する肯定的な経験では、「子どもの達成や成長、子どもが仲間と仲良くなった」が多く、その一方で、否定的な経験では、「子どもが負けた、レギュラーから外れた」が挙げられるが、保護者同士のトラブルが否定的経験として挙げられていることが示されている。スポーツにおける試合や、試合に関する出場機会の結果が、子どもや保護者に、肯定的にも否定的にも影響し、またスポーツには、子どもにも保護者にも、仲間から受け入れられている自信である「受容感」を育む機会として有効である可能性が考えられる。しかしながら、保護者同士のトラブルが親自身の否定的体験として挙げられていることは、レスリング競技を含めたすべてのスポーツに関わる保護者のあり方について、課題が潜んでいる可能性があると考えられる。

Smoll et al. (2011) は、15歳以下のアスリートが競技に取り組む際の指導者・保護者・アスリートの関係性を「アスレティック・トライアングル」と呼んでいる。この社会的システムの構成者は、お互いに複雑に関係し合っており、これらの相互作用の質が子どもの心理的発達に大きな影響を与えるものであり、指導者はアスリートのスポーツ経験の価値を高めるような方向に向かわせる立場にあり、保護者は、親密性、コミットメント、相補性の感覚によって定義される指導者とアスリート関係の質に影響を与えることができると示している。日本オリンピック委員会（2016）では、競技環境を整備し、アスリートがパフォーマンスを最大限発揮できるように連携協力する関係者のことを「アントラージュ」と定義し、選手たちの最善の環境を提供し支援することを目的として活動を行っている。平成27年度にアントラージュ向け教育教材を作成しており、コーチ（指導者）・保護者を対象にしたものと、これからの時代にふさわしい「アスリートの支え方」の理解を促すものとで構成されてい

る。指導者と同様に、保護者がアントラージュの中でも特に重要な役割を担う存在であることが示されている。

これらのことから、保護者の行動がスポーツに関わる子どもたちのスポーツ環境にもたらす影響は少なくはないと考えられる。しかしながら、日本スポーツ協会（2014）や文部科学省（2018）では、アスリートやコーチを対象とした「グッドプレーヤー像」及び「グッドコーチ像」について提言しているが、スポーツや運動に関わる子どもに対する保護者のあるべき姿に着目した研究はほとんどない。そこで本研究では、レスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者への調査を通じて、スポーツ活動に取り組む子どもを持つ保護者の役割に関する実態を明らかにし、「グッドペアレンツ像」の提言に向けた基礎資料を作成することを目的とした。

## 方 法

### 1. 対象者

レスリング競技に取り組む小学1年生から中学3年生の子を持つ保護者54名（男性23名：45.6 ± 7.47歳、女性31名：42.4 ± 4.81歳）を対象とした。

本研究を実施するにあたり、対象者には、本研究により得られた個人情報公表されることがないこと、研究データとして用いる可能性のあることを書面をもって説明し、同意が得られた対象者が本研究に参加した。なお本研究は、専修大学スポーツ研究所研究倫理委員会の承認（受付番号2022-0429）を得て実施した。

### 2. 調査時期

調査期間は2021年6月～10月であり、対象者へはGoogle formを用いたアンケート形式で回答を求めた。

### 3. 調査内容

調査内容は、1) あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツに期待すること。2) あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツの指導者に期待すること。3) 子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツを通じてあなた自身が感じる（感じた）こと、学ぶ（学んだ）こと。4) あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツのチーム内で保護者同士のトラブルや違和感があったこと。の4項目とした。Google form内の記述欄へ自由記述による回答を求めた。

#### 4. 分析方法

本研究では、質的研究の手法を用い、回答欄の自由記述データをカテゴリー化し、構造化した。分析は、調査データの分析プロセスで新たな発想や仮説を生み出すことができるKJ法を採用し帰納的に分類した。分類作業は共同研究者であるK氏と共に行い、妥当性および信頼性を維持するように努め、各カテゴリーの作成は久崎・石山(2012)、藤後ら(2017)、専修大学スポーツ研究所(2023)を参考にし、カテゴリーの妥当性やカテゴリー間の相違点も適宜修正を行って実施した。

#### 結果

自由記述データから小カテゴリー(67, 50, 43, 22)、中カテゴリー(17, 16, 18, 8)、大カテゴリー(8, 6, 11, 5)に集約された。以下、各項目について大カテゴリー【 】、中カテゴリー《 》、小カテゴリー[ ]で記し、大カテゴリーに沿って述べる。

- 1) あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツに期待すること(表1)。

表1 あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツに期待すること

大カテゴリー	中カテゴリー	No	小カテゴリー
精神の成長	1 忍耐力	1	忍耐力
		2	諦めないところ
		3	諦めない心
		4	諦めない気持ちなどのメンタル面
		5	諦めない気持ち
	2 ストレスコーピング	6	精神的鍛練(動じない心)
		7	ストレスへの耐性
		8	緊張感
		9	挫折回復力
		10	メンタル
		11	精神力の育成
	3 強さと優しさ	12	強さと優しさ
		13	スポーツマンシップ
		14	強くて優しい人間になること
		15	心の強さと優しさ
セルフコントロール	4 努力	16	努力して得る事
		17	努力すること
		18	目標をもってコツコツ努力すること
		19	集中力
5 集中力	20	集中すること	
	21	自分に対する自信	
自己効力感	6 効力感	22	練習の繰り返しでできないことができるように
		23	自己肯定感の向上
		24	出来るという気持ち
		25	スポーツの楽しさ
楽しさや喜び	7 幸福感	26	勝つことの喜び
		27	勝つことから学べるアスリートの思考と行動
思考力の向上	8 考える力	28	考える力
		29	負けることから学べる敗者の気持ちと思考
		30	勝ち方
競技能力向上	9 競技力向上	31	テクニック
		32	緩急のある動き
		33	身体の使い方
	10 身体能力向上	34	体幹の育成
		35	身体能力向上
		36	協調性
コミュニケーション能力	11 協調性		

大カテゴリー	中カテゴリー	No	小カテゴリー
		37	チームでの協調性
		38	団結心
		39	先輩・指導者を敬う
		40	相手に対するリスペクト
	12 コミュニケーション	41	コミユカ
		42	仲間とのコミュニケーション
		43	コミュニケーション能力
		44	コミュニケーション能力の向上
	13 関係性を学ぶ	45	人間関係を学ぶ
		46	人間関係の構築
	14 役割の把握	47	小さな子の面倒を見る
	15 配慮や気遣い	48	人への配慮や気遣い
		49	他人への思いやり
		50	思いやり
		51	相手のしたいことを考える事
ソーシャルスキル	16 礼儀とマナー	52	礼儀やルールを学ぶ
		53	礼儀やルール
		54	礼儀を学ぶ
		55	礼儀を身に付ける
		56	礼儀
		57	礼儀を学び仲間を大切にする
		58	礼儀作法
		59	礼儀正しさ
		60	挨拶
		61	言葉遣い
	17 感謝のきもち	62	感謝の心
		63	感謝のこころ
		64	感謝のきもちをもつ
		65	出来ることへの感謝の気持ち
		66	感謝の気持ち
		67	感謝

保護者がスポーツを通じて子どもに期待していることは、【精神の成長】、【セルフコントロール】、【自己効力感】、【楽しさや喜び】、【思考力の向上】、【競技能力向上】、【コミュニケーション能力】、【ソーシャルスキル】の8カテゴリーに集約された。

2) あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツの指導者に期待すること(表2)。

保護者がスポーツを通じて指導者に期待していることは、【楽しさや喜び】、【精神の成長】、【セルフコントロール】、【競技能力向上】、【コミュニケーション能力】、【ソーシャルスキル】の6カテゴリーに集約された。

3) 子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツを通じてあなた自身が感じる(感じた)こと、学ぶ(学んだ)こと(表3)。

保護者が、子どもの取り組むスポーツを通じて保

護者自身が感じている(感じた)こと、学んでいる(学んだ)ことは、【可能性の広がり】、【精神の成長】、【レジリエンス】、【自己効力感】、【自己肯定感】、【ソーシャルスキル】、【コミュニケーション能力】、【支援に対する価値観】、【保護者間の配慮】、【親子間の配慮】、【親子の関係性強化】の11カテゴリーに集約された。

4) あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツのチーム内で保護者同士のトラブルや違和感があったこと(表4)。

保護者が、子どものスポーツを通じて関わっている保護者間において、これまでに経験したトラブルや違和感については、【勝敗に対する価値観】、【習い事としての価値観】、【指導者との関わり】、【保護者との関わり】、【支援に対する価値観】の5カテゴリーに集約された。

表2 あなたの子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツの指導者に期待すること

大カテゴリー	中カテゴリー	No	小カテゴリー	
楽しさや喜び	1 幸福感	1	競技の楽しさ	
		2	楽しんでほしい	
		3	スポーツの楽しさ	
		4	楽しみながらスポーツを続けられる環境	
		5	厳しくも楽しみながら取り組める環境	
		6	頑張ればその先にある喜びを知る	
		7	競技を好きにさせる興味をわかせる	
		8	競技への興味	
精神の成長	3 勝負による感情	9	勝ったときの喜び	
		10	負けたときの悔しさ	
	4 忍耐力	11	諦めないところ	
		12	諦めない心の育成	
		13	諦めない心	
		14	諦めない気持を育む	
		15	諦めないこと	
		16	諦めないきもち	
		17	諦めず努力する気持ち	
	5 ストレスコーピング	18	心の強さ	
		19	厳しさ	
		20	精神力の育成	
	6 精神面	21	精神面	
		22	チャレンジすることの大切さ	
		7 継続力	23	やり続けることの大切さ
			24	続けることの大切さ
			25	1つの物事をやり続ける大切さ
8 努力		26	努力することの大切さ	
	9 自己管理	27	練習と遊びのメリハリ	
		10 集中力	28	集中力
	29		集中する力	
	30		集中力の向上	
	31		集中力を育ててほしい	
競技能力向上	11 競技力向上	32	身体の使い方	
		33	競技の技術	
	12 競技感覚の獲得	34	勝負感	
13 運動能力向上	35	体幹		
コミュニケーション能力	14 リーダーの理解	36	指導者の威厳	
ソーシャルスキル	15 礼儀と挨拶	37	礼儀とルール	
		38	礼儀やルール	
		39	ルールを守る	
		40	礼儀作法	
		41	礼儀・ルール	
		42	礼儀を学ぶ	
		43	礼儀をみにつける	
		44	礼儀	
		45	礼儀や思いやり	
		46	挨拶や礼儀	
		47	あいさつ	
		48	大きな声であいさつ	
		16 感謝のきもち	49	感謝する
			50	感謝の気持ち

表3 子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツからあなた自身が感じる（感じた）こと、学ぶ（学んだ）こと

大カテゴリー	中カテゴリー	No	小カテゴリー
可能性の広がり	1 子どもの可能性の広がり	1	可能性や感情表現の広がり
		2	子どもの可能性
精神の成長	2 精神面での成長	3	諦めずに練習する子供の力強さ
		4	諦めない心
		5	努力、我慢、忍耐、精神力
		6	勤勉な精神的な成長
		7	精神的に鍛えられている
		8	心の成長
		9	負けても続ければ次の成長に繋がる
		10	勝てなくても地道に力をつけている
自己効力感	4 効力感	11	練習すればうまくなる
		12	できなかったことができるようになる
		13	練習の繰り返しでできないことができるように
		14	続けることの大切さ
		15	コツコツ取り組む姿勢
自己肯定感	5 自己肯定感の獲得	16	自己肯定感の育成
		17	ネガティブ発言の激減
ソーシャルスキル	6 礼儀・マナー	18	礼儀
		19	あいさつ・礼儀
		20	礼儀作法
コミュニケーション能力	7 競技意識	21	礼儀・スポーツマンシップ
		8	コミュニティ理解と自己理解
		9	コミュニケーション能力
支援に対する価値観	10 保護者介入はサポート程度という理解	22	人間関係と自分を知る
		23	協調性
		24	人とのコミュニケーション
		25	あくまでサポート
		26	黙って見守る
保護者間の配慮	11 支援の在り方の理解	27	親も同じ目線でサポートすること
		12	本人の意思を尊重する理解
		28	子どもの意思を大切にしておらかな気持ちで見守る
		29	子どもの意思と成長にまかせる
		30	送迎や見送りで大変
親子間の配慮	13 保護者の負担	31	子どもとの関わり方にいろんな考え方があると気付く
		32	気配りや配慮
親子間の配慮	14 子どもにかかる言葉の配慮	33	伝えることの難しさ
		34	子どもへの声掛けの難しさ
		16	モチベーションを高める
		35	アメとムチの難しさ
		36	やる気の引き出し方
		37	楽しませること
		38	結果ではなく成長を認める大切さ
39	やる気が能力の向上につながる		
親子の関係性強化	17 モチベーションの低下要因	40	相手を気にしすぎると子供のプレッシャーになる
		41	子と一緒に考えられようになった
		42	勝負での感情を分かち合える
		43	楽しいと話してくれたことが嬉しい

表4 子どもが最も熱心に取り組んでいる運動やスポーツのチーム内での保護者同士のトラブルや違和感

大カテゴリー	中カテゴリー	No	小カテゴリー
勝敗に対する価値観	1 勝敗への価値感の相違	1	勝利に対する価値観
		2	勝敗の熱の入れ方の温度差
習い事としての価値観	2 習い事としての価値観の相違	3	月謝に関する考え方の違い
		4	習い事に対する価値観の違い
		5	競技を習いに来る人と安価な体操教室で来る人では熱心さが違う
指導者との関わり	3 指導に対する関わり方	6	親がコーチに口を出しすぎる
		7	長年やっている保護者の言葉や態度
		8	強くなると勘違いしてマウントをとる保護者
保護者との関わり	4 関係性	9	人間関係の悪化
		10	トラブルメーカーの保護者がいて巻き込まれる
	5 社会性の相違	11	社会倫理のないモンスターがいて皆で困る
		12	ビジネスマナー違反
	6 意識的違和感	13	感じの悪い保護者がいる
		14	意識が高くなることはよいことだが、そうでない人を軽蔑するような心が見え隠れする
支援に対する価値観	7 子どもの世話に対する意識相違	15	練習に対する意識
		16	熱の入りすぎた保護者
		17	熱心さに対する考え方の違う人に対する対応が変わる親に驚く
	8 非協力的	18	お世話に対する価値観の違い
		19	自分の子だけ世話をするかどうかの相違
		20	他人軸の多い事
		21	全く協力しない保護者
		22	自分の子どものしか考えない親

## 考 察

レスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者がスポーツに期待していることは、身体能力や競技力を育む【競技能力向上】に関する回答よりも、諦めない気持ちをはじめとする【精神の成長】、協調性や人間関係を学ぶなどの【コミュニケーション能力】、礼儀やマナーといった【ソーシャルスキル】、【セルフコントロール】、【自己効力感】、【思考力の向上】などの人間教育的な効果を期待する回答が多かった。スポーツ活動による【楽しさや喜び】といった回答も得られた。大学のスポーツサークルに通う子供たちの保護者を対象とした「親が子どものスポーツ活動に対して期待すること」を調査した小倉ら(2017)によれば、親が子どものスポーツ活動に期待することは、子どもが技術的に上達することよりも、人間教育的な効果への期待が高く、「運動に親しみ、楽しく体を動かす」ことのように身体リテラシーの可能性を感じ生涯スポーツに繋がる要素が示唆されており、レスリングに取り組む子どもを持つ保護者において

も同様の結果が得られたと考えられる。

同様に、レスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者がスポーツの指導者に期待していることの結果は、【精神の成長】や【ソーシャルスキル】、【セルフコントロール】や【楽しさや喜び】、【コミュニケーション能力】、【競技能力向上】であり、保護者たちは、子どもたちにスポーツ活動を通じて期待しているものと類似した内容を、指導者たちに期待していることが示唆された。保護者たちは、スポーツを通じて、将来的に社会生活において役立つ人間教育的効果を育む関わり方を指導者に期待していると考えられるため、レスリング競技に関わる保護者たちは、子どもたちにスポーツ活動を通じて身体リテラシーの可能性と人間教育的効果を期待しており、同時に指導者の役割としても期待していることが明らかとなった。

一方、保護者自身が感じている(感じた)こと、学んでいる(学んだ)ことは、【可能性の広がり】、【精神の成長】、【レジリエンス】、【自己効力感】、【自己肯定感】、【ソーシャルスキル】、【コミュニケーション能力】、【支援に対する価値観】、【保護者間の配慮】、【親子間の配



慮】、【親子の関係性強化】であった。子どものスポーツ活動に期待していることと同様の回答も得られた一方で、保護者がスポーツ活動を通じて子どもに期待すること、指導者に期待することの回答では見当たらない内容が多くなった。まず、子どもの取り組むスポーツを通じて保護者自身が感じている（感じた）こと、学んでいる（学んだ）ことの結果の特徴の1つとして「子どもへの声掛けの難しさ」や「相手を気にしすぎると子どものプレッシャーになる」などの【親子間の配慮】に関する内容、「子と一緒に考えられるようになった」、「勝負での感情を分かち合える」などの【親子の関係性強化】といった内容が見られたことが挙げられる。

Smoll et al. (2011) は、保護者は子どもたちがスポーツ活動をする上で、保護者自身はかなり積極的に活動しなくてはならないと思込んでいる場合が少なくないと示している。さらに、保護者の影響が看過できない子どもたちのストレス源の一つの要因にもなっており、自分の子どもと自分を重ね合わせるスポーツ同一化の程度が過剰になる場合であることも述べている。井梅ら(2017)によれば、同一化が高いほど、攻撃的な声かけが多いことが明らかになっている。同一化の程度が過剰になると、保護者自身の価値観より成功や失敗をはかり、子どもはスポーツ活動に対して重荷を背負うことになる。保護者の行動や感情表現が、子どもの試合や練習のパフォーマンス、運動有能感に影響することが明らかであるため、保護者の子どもに対する姿勢は、スポーツや運動の参加・継続だけでなく取り組む姿勢や意識にも関係するものであり、身体リテラシーの発達にも影響を与えるものと考えられる。

この項目の結果の特徴の2つ目として、「あくまでサポート」、「子どもの意思を大切にしておおらかな気持ちで見守る」、「送迎や見送りで大変」などのスポーツに取り組む子どもとの関わり方における新たな気づきや課題があることが示唆されていた点がある。さらに、「子どもとの関わり方にいろんな考え方があると気づく」、「心配りや配慮」などの【支援に対する価値観】、【保護者間の配慮】という、その環境に身を置いたことによる気づきがあることが示唆されている。保護者自身の社会性の幅を広げる学びとなっておりと同時に、保護者間の価値観には差異があり、理解することの必要性が示されていると考えられる。

レスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者における、保護者間のトラブルや違和感についての結果は、【勝敗に対する価値観】、【習い事としての価値観】、【指

導者との関わり】、【保護者との関わり】、【支援に対する価値観】となり、スポーツ活動の主体は子どもたちであるが、支えている保護者同士の関係性には、競技に関連した「直接的な問題」とは言い難い、「間接的な問題」があることが示唆された。競技大会などの子どもが臨むスポーツイベントにおける保護者の振る舞いについて、Smoll et al. (2011) は、「行動規範」（以下、「保護者の行動規範」と称す）として6項目を示している。1) イベント中は観客エリアにとどまること。2) 指導者の邪魔をしない。練習やゲーム中は、保護者は子どもに対する責任を指導者に任せなくてはならない。3) 子どもたちに興味を示し、励まし、支援する。良いパフォーマンスへの賛辞はもちろん、努力に対する応援を忘れない。努力をすることが大切であるというメッセージを繰り返して送る。4) 子どもたちに対して叫んで指示や批判をしない。5) 指導者や審判らが支援を求められると進んで協力する。6) 両チームの競技者、他の保護者、審判、指導者らに対して暴言を吐かない。というものであり、この6項目に基づく行動を推奨している。これら「保護者の行動規範」が示される背景には、スポーツイベントでの保護者による過度なスポーツ同一化や子どもの競技に親が過度に関わることで指導者をはじめとする関係者の立場を尊重しなくなることで生じる状況があるためである。村田らは(2017)は、保護者らの問題行動の3因子として「不平不満」、「暴力的言動」、「現場介入」とあげており、「保護者の行動規範」は海外の研究ではあるが国内の保護者に対する行動規範としても有効であると考えられる。さらに、藤後ら(2017)は、保護者による子どもたちへの声かけは、指導者によるネガティブな働きかけと同様、子どものスポーツへのモチベーションや、同じチームでプレーする子ども同士の関係性への影響も懸念される内容であるとしている。これらは主に応援席などのスポーツの現場において子どもたちに投げかけられるものであり、そこには他の子どもの保護者も同じ場にいることも考えられ、子どもが叱責されるのをそばで聞かされることにもなり、その影響も懸念されると述べている。先行研究では保護者の子どもへの声掛けについての影響が述べられているが、このような態度に対する他の保護者への影響も大きい可能性があると考えられる。競技会等のスポーツイベントにおいて保護者の応援する姿勢に熱が入ることは容易に想像できることではあるが、日常的に取り組む競技練習の中で子どもたちや他の保護者との関わりにおいても類似の現象は起こり得るため、「保護者の行動規範」は、スポーツイベント以外

の場でも保護者たちに求められている振る舞いに通じる点があるのではないかと考えられる。しかしながら、宮本（2023）によれば、国内のスポーツ活動をする子どもたちを「ささえる」保護者の負担は母親に偏りが多く、母親のシャドウ・ワークに頼って子どものスポーツを成立させる状況は今なお色濃くあり、その負担から子どもをスポーツから遠ざける可能性があることが示唆されている。世界経済フォーラム（2023）が発表した男女格差の現状を各国のデータをもとに評価した「Global Gender Gap Report」（世界男女格差報告書）において、日本のジェンダーギャップ指数は146カ国中125位であり、2006年の公表開始以来、最も低い順位を示し、いまだ男女格差が埋まっていない現状も浮き彫りとなっている。スポーツ活動の支える役割が母親に偏る背景には、日本の社会問題と通じる部分がないとは言い難い。それゆえに、「保護者の行動規範」はあくまでも海外の研究で示されたものであり、項目によっては日本国内の現状にそぐわないものもあるため、レスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者のあるべき姿「グッドペアレンツ像」や、各スポーツ競技に着目した「グッドペアレンツ像」の検討・提言することが重要と考えられる。

加えて、大橋ら（2017）の、小学生の地域スポーツの指導者を対象とした調査によれば、指導者たちがスポーツ活動の中で「嫌だ・困った」と感じることは、子どもや指導者との問題よりも、保護者の関わり方のばらつきによる保護者との関係にあった。小学生を対象としたスポーツ活動においては保護者の関与が大きく、指導者たちは保護者の関わり方の違いについて困惑をしており、課題を抱えていることが示されている。同じ競技、同じ練習環境に身を置き、子どもたちがスポーツ活動に取り組んでいるとはいえ、それぞれの家庭に違いがあるように保護者それぞれの価値観があることは容易に想像できることである。保護者間や指導者においても価値観の違いを全て受け入れることは困難なものであるため、価値観の違いがあることを理解し、それぞれに子どものスポーツ活動における活躍を見守ることは、子どもたちがスポーツ活動を通じて身体リテラシーを育むための保護者の在り方として必要な要素になると考えられる。

以上のことから、本研究の結果から見えたレスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者のスポーツ活動における「グッドペアレンツ像」の要素は、「①子どもの身体リテラシーの可能性を信じること、②スポーツを通じて人間教育的な効果を期待すること、③保護者間の価値観に差異があることを理解すること、④子どもたちの活

躍を見守ること」の4点であると考えられる。

## 結論と研究の限界

本研究は、レスリング競技に取り組む保護者へのアンケート調査を通じて、スポーツ活動をする子どもを持つ保護者の実態を明らかにし、「グッドペアレンツ像」の提言に向けた基礎資料を作成することを目的として、子どものスポーツ活動における保護者の認識等の実態について考察した。その結果、本研究では、レスリングに取り組む子どもを持つ保護者の多くがスポーツを通じた人間教育的な効果を求めており、子どもがスポーツ活動を続けていくにあたって保護者の関わり方によって生じる競技内外の問題や課題があることを改めて明らかにすることができた。そのことから、「グッドペアレンツ像」の要素として、「①子どもの身体リテラシーの可能性を信じること、②スポーツを通じて人間教育的な効果を期待すること、③保護者間の価値観に差異があることを理解すること、④子どもたちの活躍を見守ること」の4点が明らかとなった。また、スポーツ活動を通じて子どもたちの身体リテラシーを育むためには、保護者たちの直接的な関わり方だけでなく、間接的に生じる状況も指導者と同様に影響力が大きいに思われる。このような保護者の関わり方によって起こり得る保護者間の問題や課題の発生を予防するためには、日常的な練習環境においても意識すべき課題の把握および問題につながったプロセスの共通理解が必要であるため、国内のスポーツ活動に取り組む子どもを持つ保護者向けの行動規範となる「グッドペアレンツ像」の検討が早急に求められるといえよう。一方、本研究では、レスリング競技に取り組む子どもを持つ保護者のみを調査対象としたため、異なるスポーツ活動に取り組む子どもたちと保護者全体に内在する課題を考察する点に限界がある。加えて、アンケート調査における記述内容の内容分析はその解釈に偏りが含まれることが否めない。本研究で得られた結果を基礎資料とし、今後は、他競技を含めたインタビュー調査を実施するなどの検討を重ねながら、スポーツ活動に取り組む子を持つ保護者対象の「グッドペアレンツ像」の検討を重ねる必要があると考えられる。

本稿は、令和5年度専修大学研究助成共同研究「研究課題 ジュニアレスラーにおける身体リテラシー向上プログラムの作成」の研究成果の一部である。

【参考文献】

- Averill, P. M., and Power, T. G. (1995) Parental attitudes and children's experiences in soccer: Correlates of effort and enjoyment. *International Journal of Behavioral Development*, 18: 263-276.
- Babkes, M. L., and Weiss, M. R. (1999) Parental influence on children's cognitive and affective responses to competitive soccer participation. *Pediatric Exercise Science*, 11: 44-62.
- ベネッセ教育総合研究所. (2015) 第5回学習基本調査報告書 学校外の学習機会, [https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/3\\_chp3.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/3_chp3.pdf) (参照日 2023年11月13日).
- Brustad, R. J. (1988) Affective responses in competitive youth sport: The influence of intrapersonal and socialization factors. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 10: 307-321.
- 波多野義郎, 山田俊大, 久下浩史, 藤川秋子. (2006) 親の意識は子どもの健康体力関連行動意識にどう関与するか, 九州保健福祉大学研究紀要第7号, 47-51.
- 久崎孝浩, 石山貴章. (2012) スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響: その研究動向と今後の方向性, *応用障害心理学研究*, 11: 45-67.
- International Physical Literacy Association. (2017) Everyone Choosing Physical Activity for Life, <https://www.physical-literacy.org.uk/> (参照日 2020年11月18日).
- 井梅由美子, 大橋恵, 藤後悦子. (2017) 小学生のスポーツ活動における保護者の関わり——スポーツ・ハラスメントに着目して——, *東京未来大学紀要*, 11: 1-11.
- 木村元彦, 尾縣貢. (2021) レスリング競技が小学生児童の運動有能感および運動習慣に及ぼす効果, *コーチング学研究*, 35 (1): 75-89.
- 川喜田次郎. (1997) KJ法入門コーステキスト4.0, KJ法本部・川喜田次郎研究所.
- 小松幸円, 嶋谷誠司, 山下昭子, 池田尹雄. (1992) 子どものスポーツクラブに対する母親の意識について——横浜のサッカークラブの調査から——, *日本体育学会大会第43号*, 152.
- Leff, S. S., and Hoyle, R. H. (1995) Young athletes' perceptions of parental support and pressure. *Journal of Youth and Adolescence*, 24: 187-203.
- 宮本幸子. (2023) 母親がささえる子どものスポーツ——実態と研究課題——, *年報体育社会学*, 4: 23-33.
- 三上純. (2021) Margaret Whiteheadによる「身体リテラシー」概念の検討: 日本における議論の動向を踏まえて, *スポーツ教育学研究*, 41 (2): 35-48.
- 文部科学省. (2018) グッドコーチに求められる資質能力, [https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/hakusho/nc/\\_icsFiles/afieldfile/2018/06/15/1406196\\_3\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/hakusho/nc/_icsFiles/afieldfile/2018/06/15/1406196_3_1.pdf) (参照日 2022年12月10日).
- 村山亮介, 洪倉崇行. (2017) 子供のスポーツ活動における保護者の問題行為に関する研究 保護者の問題行為の因子構造の検討. *日本体育学会第68回大会予稿集*, 98.
- 中野貴博, 四方田健二, 坂井智明, 沖村多賀典. (2019) 保護者の運動嗜好性は子ども達の活動意欲や体力に影響をおよぼすのか: 運動実践中の子ども達の体力・活動量変化による検討, *名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇*, 8 (1): 9-18.
- 日本オリンピック委員会. (2016) 平成27年度コーチング・イノベーション推進事業「アスリート・アントラージュ」の連携協力推進報告書. [https://www.joc.or.jp/about/pdf/entourage\\_report\\_2016.pdf](https://www.joc.or.jp/about/pdf/entourage_report_2016.pdf) (参照日: 2023年11月20日).
- 日本陸上競技連盟. (2018) JAAF 競技者育成指針. <https://www.jaaf.or.jp/development/model/> (参照日: 2019年11月15日).
- 日本スポーツ協会. (2014) 平成26年度コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業報告書. [https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/ikusei/doc/curriculum/model\\_core\\_2014.pdf](https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/ikusei/doc/curriculum/model_core_2014.pdf) (参照日 2022年12月10日).
- 小倉晃布, 早田 剛, 長谷川晃一. (2017) 子どものスポーツ活動への親の意識に関する研究, *環太平洋大学教職教育研究* 1巻, 69-74.
- 大橋恵, 井梅由美子, 藤後悦子. (2015) 地域スポーツにおける親子の喜びと傷つき——自由記述法による検討——, *東京未来大学研究紀要*, 8: 27-37.
- 大橋恵, 井梅由美子, 藤後悦子, 川田裕次郎. (2017) 地域スポーツにおけるスポーツのコーチの喜びと困惑——コーチ対象の調査の内容分析——, *コミュニティ心理学研究*, 20 (2): 226-242.
- 岡田明, 岸本肇. (1977) スポーツ教室に通っている児童の実態について——「親への意識調査」をもとにして——, *日本体育学会大会第28号*, 127.
- 早乙女誉, S. Nicole CULOS-REED. (2018) アスリー

- ト育成と学校体育におけるフィジカル・リテラシーの役割と重要性—カナダの事例と日本での応用可能性—。スポーツ産業学研究, 28:141-148.
- 佐々木卓代. (2009) 子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感: スイミングスクールを対象とした調査から. 家族社会学研究, 21(1):65-77.
- Scanlan, T. K., and Lewthwaite, R. (1984) Social Psychological aspects of competition for youth sport participants: I. Predictors of competitive stress. *Journal of Sport Psychology*, 6: 208-226.
- Scanlan, T. K., and Lewthwaite, R. (1986) Social Psychological aspects of the competitive sport experience for male youth sport participants: IV. Predictors of enjoyment. *Journal of Sport Psychology*, 8: 25-35.
- 世界経済フォーラム. (2023). *Global Gender Gap Report 2023*, [https://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GGGR\\_2023.pdf](https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2023.pdf) (参照日: 2023年11月22日).
- 専修大学スポーツ研究所. (2023) レスリング競技を通じた「身体リテラシー」向上実践プログラム.
- Smoll, F., Cumming, S., & Smith, R. (2011). Enhancing Coach-Parent Relationships in Youth Sports: Increasing Harmony and Minimizing Hassle. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 6(1): 13-26.
- 渡辺泰弘, 松本耕二, 高橋季絵. (2014) 児童のスポーツ習慣形成に関する親の影響 (子ども・青少年スポーツの振興に関する研究), *SSF スポーツ政策 研究*第3巻1号, 335-34.